ひまわりからのメッセージ

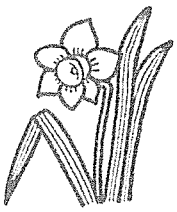
125号

2022.2.21

NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

大切な教えを心に刻んで……



わが家の玄関に木彫の「一期一会」の額が飾ってあります。私がかつてひまわり学園でつかえた故北山俤索園長が手彫りされたものです。俤索というお名前の由来は、胎内に在った時に父親を亡くされ、年齢のはなれたお兄様が「おもかげをさぐる」と命名されたと伺いました。

ひまわり学園は、昭和四十七年に重度肢体不自由児母子通園施設として開設された施設で、当初は脳性小児まひや筋ジストロフィーなどの病気をかかえているお子さんが殆んどでした。歩くことはもちろん座ることも難しい子、発語が未だの子、食事は誤嚥してしまう子などでしたが、一人ひとりが懸命に生きている子たちでした。私も開設当時のことは知りませんが、保護者の方々の長年の熱意と悲願があったと聞いています。

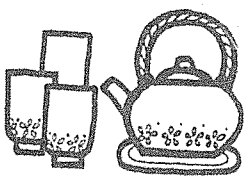
そんな学園に園長として赴任されたのは、行政官で、福祉の専門家ではありませんでした。今の世は何でも資格が幅をきかせるようになってしまいましたが、私は人としての生き方を北山園長から学ばせていただいたと思っています。

こんなことがありました。運動会練習の折のことです。体の不自由さをもつ子ども達の支援や介護には力が必要です。抱き方や体の支え方も一人一人ちがいますから職員も疲れます。休憩時間になって一人の職員が職員たちにお茶を配ろうとしました。その時、北山園長は、ポツリと「子どもたちには無いのかな…」と言われたのです。物言えぬ子ども達の手は汗ばんでいたのに、職員が誰一人としてそれに気づかないことに心を痛められたのです。いつも寡黙な園長の静かな声でしたが、その表情には深い哀しみが見てとれました。

今、どんな人も福祉に介入できる時代になり、子どもたちの通所の事業所も続々と開設されていきます。でも、本当に子どもたちのことを第一に考えて、将来を見通して療育がなされているのでしょうか。保護者を支えつつ、共に子育てをしていく姿勢は当然あるでしょうが、ふと福祉の闇を感じることもあります。

わが家の玄関の額の前に佇むと、北山園長の声が聴こえてくるように思います。叱られたことは一度もありませんでしたが、穏やかな声で「おまはんは大事なことを忘れとらへんかな…」と、内面を問われている気がするのです。大切な方をまた一人亡くしました。

LD・ADHD 通級指導教室について



「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（平成二十四年七月）には、「特別支援学級や通級による指導の担当教員は、特別支援教育の重要な担い手であり、その専門性が校内の他の教員に与える影響も極めて大きい。このため専門的な研修の受講等により担当教員としての専門性を早急に担保するとともに、その後も研修を通じた専門性の向上を図ることが必要である。」と示されています。

今年も通級指導教室で学ぶ子どもたちが増え、教室も増設されています。発達障害などがあって通級で学ぶ子どもたちは、この五年間に一、五倍になったと言われています。

こうした状況をふまえ、平成三十一年には「発達障害のある子供達の学びを支える～共生に向けた「学び」の質の向上プラン」が示され、令和二年には、その具体的な方策として『初めて通級による指導を担当する教師のためのガイドライン』が出されています。

通級に通う子どもたちは学校生活のほとんどを通常学級で学んでいます。ですから、通級での指導が在籍する学級につながり学校生活や地域生活における適応状態が改善することが望まれるわけです。通級担当者には、子どもたち児童生徒への指導とともに保護者や学校関係、関係機関との連携・協働も、専門性として期待されるところです。

通常学級と連携・協働していくために

先日、某学校で通常学級を担当している先生とお話していた時のことです。「このAさんという生徒は通級指導教室ではどんなことを学んでいるのですか？」とたずねました。検査も実施した方が良いと思われるお子さんだったので「検査などについては、どんな話し合いをされてきたのですか？」とも尋ねてみました。すると驚いたことに「通級で何をしているのか知りません。検査のことも通級の先生が話しているのではないですか。私は知りません。」という返事が返ってきました。校内に通級指導教室があるにもかかわらず、まるで「通級の子は自分の担任している子ではありません。」と言わんばかりの様子に言葉を失いました。

特別支援教育士資格認定協会が発行している『LD/ADHD&ASD』という月刊誌には、「通常学級と連携・協働していくために大切なこと」として通級担当者の言葉がのっていました。

◎担任の先生との信頼関係を築く

「専門的なアドバイスをしなければならないと思うと、それがプレッシャーになることもある。まず身近な出来ごとを一緒に

考えていくこと。まず担任の先生の話を聞くことから始めてはどうでしょう。」

◎子どもを捉える視点を揃える。

「まず担任の先生が通級に通う子どもの特性を理解していること、そして通級の担当教員も又、子どもの特性を理解し、支援の方法を担任の先生に伝えることができること。」

これは当然のことです。子どもたち一人ひとりの特性をまず理解できていなければ何も始まりません。前述したような担任では子どもの特性理解はできていないでしょうし、その生徒が何のために通級を利用したのかも分かっていないと思われます。又、通級担当の教員も特性理解ができていないかもしれません。

この特性理解ということは、保護者の方も同様です。サポートブックを持っておられて、園から小学校、小学校から中学校への引きつぎ会の場で、どうしてサポートブックを作ったのか、自分の子にどのような特性があるのかを理解されていないのではないかと思われる保護者の方にお会いすることがあります。表面上のオブラートに包まれた様な先生方の話と、学校にお任せムードの保護者の方に出会うと、これから大変だなあと心が痛みます。特性理解をした上で家庭も学級担任も通級担当者も足並みを揃えていかなくてはなりませんね。

◎積極的に学級の様子を見に行く。

通級を受けている子の中には、学習で困っていたり、人とのかかわりで困っていたりしますが、一対一の学習が基本の通級では、学級での困りの状況が余り見えません。

「担当教員が積極的に学級の様子を見に行くことで、子ども達が何に困っているのか、担任の先生がどんなことで困っているのかをリアルタイムで知ることができます。そうすることで、できそうな支援をその場で担任の先生に伝えたり、次の通級の学習の中に取り入れたりすることができます」。そして「一緒に授業を受けたりする中でクラスの子との関わり方をその場で教えたり、授業のルールをわかりやすく伝えたりできます」。

通級に通う子がとても多かったり、他校から通級してくるお子さんだったりすると、学級の様子を見にいくことは、なかなか難しいかもしれませんが、連携・協働という意味では大切にしたいことですね。

◎テストやノート、プリントなどを積極的に活用する。

「子どもたちの実態を把握するための材料がテストやプリントにはたくさんあるので担任の先生にコピーをもらうようにしています」。LDのお子さんなどは特に必要でしょう。

◎通級指導記録の活用

「授業の後には保護者用の指導記録と担任用の指導記録を書いています。担任用の指導記録には、保護者用と同様に、

学習の様子やトレーニングの内容を書いた上で、今回の学習がその子にとって、どういう「意味」や「必然性」があるのかを書くようにしています。通級での学習の様子やトレーニングの内容だけが書かれていても、担任の先生からすれば、今通級で何をやっているのかを知るだけで、それ以上のことは分かりません。しかし今回行った学習がその子にとってどういう「意味」があるのか、そして、どうしてこの学習を行う「必然性」があるのかを書くことで、その学習の成果を一緒に確認することができます」と、書かれていました。

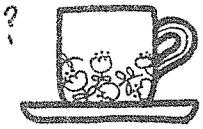
そして実例をあげて、「ぼくはクラスのみんなから嫌われている」「いつも僕ばかり嫌なことを言われる」と言ってクラスの子との関わりを避けていたA児に対し、認知療法を取り入れ、考え方の偏りを改善する方法を取り入れたことが書かれています。担任の先生にも認知療法とはどういうものか、この学習を取り入れることの必然性を理解してもらって、学級でA児が「いつも僕ばっかり」とか「皆が僕を嫌っている」等と発言した時には「本当にいつものこと？」「みんなって言うけど全員？」等、考え方の偏りをほぐす声かけをしてもらったとのことでした。

◎専門的な知識を身につける。

「子どもたちの実態は実に様々です。その子どもたちと向き合い、よりよい指導をしていくためにも専門的な知識を得たり、常に最近の情報に目を向け、そして得た知識を余すことなく担任や周りの先生たちに伝えていくことで、通級の子どもたち人の理解が深まり、一緒になって指導・支援を行うことができます。」

通級で何を学ぶのか、子どもたち一人一人にとって、必要なものが違って当然です。SST？、コグトレ？、ビジョントレーニング？、まずは子どもの実態把握なのでしょう。

通級卒級したら 個別支援計画は不要？本当に？



通級指導教室に通う子どもたちの多くは特性のある子どもたちです。将来、生き難さをかかえていく子もいると思うのですが、そんなに簡単に片づけてしまって良いのでしょうか。家庭に引きこもってしまっている人や、義務教育後に支援が引きつがれずに困っている人、就労できなかったり、就労してから苦しんでいる人たちに出会うと、その人の歩んできた道のことを考えてしまいます。例え苦手な所があっても、適切なアドバイスや支援があったら、こんなに苦しまなくても良かったのではないか…と思うのです。「うちの子は大丈夫なんです」とおっしゃるお母さん、私たち誰もが支え合って生きています。支援をもらって生活しています。担任の先生も保護者の方も、本当にいいのか、よく考えてみて下さい。

センター親の会、次回は四月十一日です。